

# 地域づくりに効果的な市民参加型グリーンインフラのあり方に関する研究

19-3A134 山下 湧雅  
指導教員：西村 亮彦

グリーンインフラとしてのみどりの役割が注目を集めている。みどりが有するまちづくり上の効果として、環境形成のみならず、社会的交流・健康福祉・教育・経済など、多様な効果が挙げられる。しかしながら、少子高齢化が進み、地方自治体の財政が厳しくなる中、公共空間におけるみどりの整備・管理が課題になっている。小田急線の地下化に伴う地上部での「下北沢線路街」の再開発が進む下北沢では、「シモキタ園芸部」が設立し、下北沢線路街をフィールドに園芸に関わる様々な活動を行っている。本研究では先行事例であるシモキタ園芸部の活動を踏まえながら駅周辺の再整備が予定される祐天寺駅周辺地区において社会的な効果に着目した市民参加型グリーンインフラの在り方を提案した。

キーワード：グリーンインフラ、市民参加、地域づくり、植栽管理、みどり

## 1. はじめに

### (1) 研究の背景と位置づけ

近年、グリーンインフラとしてのみどりの役割が注目を集めている。みどりが有するまちづくり上の効果として、環境形成のみならず、社会的交流・健康福祉・教育・経済など、多様な効果が挙げられる。しかしながら、少子高齢化が進み、地方自治体の財政が厳しくなる中、公共空間におけるみどりの整備・管理が課題になっている。また、住宅地における民間の植栽管理についても、地域住民のみどりに対する意識については、地域差や温度差があるものと考えられる。

小田急線の地下化に伴う地上部での「下北沢線路街」の再開発が進む下北沢では、地域住民の間でみどりに関心を持つ人々が集まって「シモキタ園芸部」を設立し、下北沢線路街をフィールドに園芸に関わる様々な活動を行っている。小田急電鉄からの委託を受けて、下北沢線路街における植栽の管理を行うとともに、みどりをテーマにしたイベントやワークショップを開催し、みどりの大切さを広める活動を行なっている。また、地域住民が管理できなくなった植栽を譲り受け、管理・販売する活動なども行っている。

グリーンインフラに関する既往研究については、福岡ら<sup>1)</sup>や岩浅ら<sup>2)</sup>など、防災・減災機能に着目したものや、加藤ら<sup>3)</sup>など、みどりが人に与える影響を健康福祉の観点から調査・分析した研究が見られる。一方、市民参加型グリーンインフラの取り組みを通じた地域交流の促進やみどりに対する意識の向上、緑地管理の効率化等、社会的な効果に着目した研究は見当たらない。

本研究では、先進事例であるシモキタ園芸部の活動を踏まえながら、駅周辺の再整備が予定される祐天寺駅周辺地区において、社会的な効果に着目した市民参加型グリーンインフラのあり方を提案するものである。

### (2) 研究の目的

本研究では、①祐天寺駅周辺地区におけるみどりの現状を把握するとともに、②下北線路街におけるシモキタ園芸部の活動状況を明らかにした上で、③両地区における市民のみどりに対する意識の違いや市民交流、緑地管理の課題を明らかにすることで、④これからの時代の地域づくりに効果的な市民参加型グリーンインフラのあり方を提案することを目的としている。

### (3) 研究の対象

本研究では、祐天寺駅周辺地区を対象としたグリーンインフラの提案に向けて、先進事例である下北線路街におけるシモキタ園芸部の活動との比較・分析を行う。祐天寺駅周辺地区では現在、有志の市民団体「祐天寺グリーンクラブ」が駅前広場の植栽管理を行なっているが、メンバーの高齢化や、今後予定されている駅前広場改修後の関わり方などが課題となっている。



写真-1 祐天寺駅前



写真-2 下北沢線路街

### (4) 研究の方法

- 1章：はじめに
- 2章：祐天寺駅周辺におけるみどりの現状調査（現地踏査で、植栽の種類や大きさ、数量などを把握）
- 3章：シモキタ園芸部の活動調査（活動参加を通じて、取り組みの工夫や成果・課題を把握）
- 4章：みどりに対する意識調査（住民・店舗・役所に

アンケート・ヒアリングを実施し、植栽管理の頻度や興味関心・課題などを把握)

5章：まとめ・考察

## 2. 祐天寺駅周辺におけるみどりの現状調査

### (1) 調査方法

祐天寺駅周辺におけるみどりの現状を把握するため、Google Maps のストリートビューを用いて、植物の種類・大きさ（高木・中木・低木・草花）、植え方（鉢植え・地植え）などの状況を確認した。ストリートビューの画像が 2022 年以前のものであった場合、及びストリートビューの画像から確認ができなかった場合には、現地調査で確認を行い、情報を更新・追加した。

収集した情報は、敷地毎に表形式で整理するとともに、イラストレーターを使用してみどりの分布状況を把握できる平面図を作成した（図-1）。



図-1 みどりの分布マップの情報整理

### (2) 調査の結果

住宅街に比べて商店街にはみどりがあまり見られないこと、住宅によってみどりの数や種類が大きく異なること、みどりの多い住宅が 1 件、ないし複数立地する箇所が存在することが分かった（図-2）。

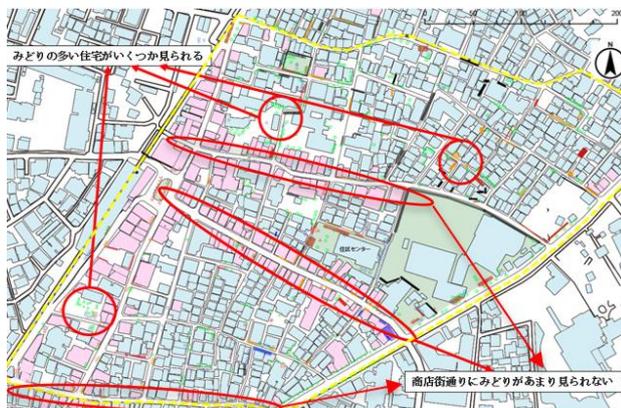


図-2 みどりの分布マップ

現地踏査の結果、住宅地のみどりについて全ての植栽に手入れが行き届いている訳ではないことも分かった。また、公共の場所に関しても、グリーンクラブの

活動で丁寧に管理されている場所がある一方、ほとんど管理されていない場所も確認できた(写真-3・写真-4)。



写真-3 ふれあい公園



写真-4 住区センター前

## 3. シモキタ園芸部の活動調査

### (1) 組織の概要

シモキタ園芸部は、世田谷区の北沢・代沢・代田地域をフィールドに、まちの植物を守り育てることを目的として、2020年に発足した団体である。みどりと人、人と人が関わり合って暮らしていくために、みどりの管理や植物の営みを活かしたイベントなどを行っている。

園芸部では、まちの植物を地域の共有資源とみなし、丁寧に手を入れて育てている。また、地元で生産したハチミツやオーガニック食材を提供する「ののちゃや」や植物のしおり作りなど、植物から得られる恵みを活かした活動も行っている。人間よりも長く生きる植物のサイクルに寄り添う形で、みどりに関わる様々な活動が派生・循環していくことで、世代を超えてまちと自然を大切に作る心が育まれることを目指している。



写真-3 活動拠点の施設



写真-4 管理を行う広場

### (2) シモキタ園芸部への潜入調査

下北線路街における園芸部の具体的な活動実態を明らかにするため、園芸部に入室し、活動への参加とメンバーとのコミュニケーションを通じて活動状況を観察・把握する潜入調査を、2022年7月7日に開始し、同年12月まで実施した。潜入調査は、週4回のペースで12時～16時の間、継続的に実施するとともに、曜日による違いを把握するため、7月25日～7月31日の期間は毎日調査を実施した。

調査の結果、メンバーの人となりや参加目的・参加状況、活動を通じた他のメンバーとの交流、緑地管理上の課題等について、以下のことが明らかになった。

- 平日に行っている植栽の維持管理（写真-5・6）は、参加率の高い一部の限られた部員の手によって行われている。部全体に向けて参加を促しているが、常連組のコミュニティがすでに形成されており、新入部員は活動に参加しにくい状況にある。

- ・ 土日祝日に行っているワークショップには、多くの部員が参加している。また、多くの部員はワークショップをきっかけに入部していると考えられる。
- ・ 現時点では、平日に行われている植栽管理の活動への参加率の向上が一番の課題となっているほか、常連組以外のメンバーに対する植栽管理の技術伝達が課題となっている。
- ・ 特に植栽管理に力を入れている「ののほら」では、世田谷区と小田急電鉄、双方の敷地にまたがった一体的な植栽管理を、小田急電鉄からの委託を受けて行っている。
- ・ 部員数の増加に伴い、全体像の把握が困難になってきている。現状の慣れ親しんだ人のみでの活動を求める声も聞かれた。



写真5・6 平日の植栽管理（左：世田谷代田，右：東北沢）

#### 4. みどりに対する意識調査

祐天寺と下北沢の両地区における、活動団体メンバーや地域住民のみどりに対する意識や興味・関心の違いなどを把握するためのアンケート調査を企画した。共通の質問項目に加え、活動団体メンバーについては、各活動へ参加したきっかけや時期、活動の参加率とその内容など、活動状況に関する項目を盛り込んだ。

<主な質問項目>

- 共通：**性別・年齢・職業・居住形態・育てている植栽の種類・グリーンインフラの認知度・まちに必要なみどりの効果
- シモキタ園芸部：**居住地・入部時期・園芸部を知った契機・入部目的・平日の活動と休日イベントの参加経験・園芸部の課題
- 祐天寺駅周辺：**みどりの維持管理等に係る活動への興味関心・地域のみどりの課題

##### (1) シモキタ園芸部への意識調査

シモキタ園芸部の部員 131 人を対象に、11 月 25 日～12 月 2 日の期間、アンケート調査を実施し、39 人からの回答を得た。アンケート調査の結果、部員の中にも園芸活動に対する温度差があることが分かった。

平日の植栽管理と土日のイベントを比べると、10 回以上の活動参加経験がある部員が多く、今回のアンケート回答者が、頻繁に活動に参加している部員であることが分かる(図-3)。また、植栽管理よりイベントの方が若干参加率が高いことが分かった。植栽管理は平日も行う必要があることから、普段平日に仕事がある部員の参加は難しいものと考えられる。また、遠方に住んでいる部員は、早朝の植栽管理への参加からは距離を置く傾向にあることが推測される。

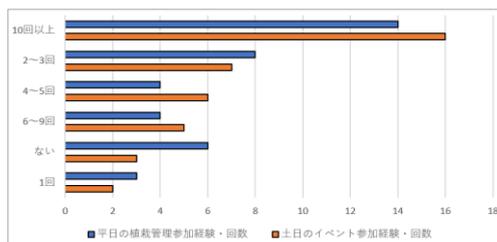


図-3 平日の植栽管理参加経験・休日のイベント参加経験

入部時期に着目すると、メディアに頻繁に取り上げられ始めた 2021 年秋～2022 年春にかけて、部員数が伸びていることがわかる(図-4)。一方で、必ずしも活動参加者が増加した訳ではないことが、潜入調査から分かっている。すでに部員数が 100 人を超えている園芸部では全員に参加を促すことは困難であると考えられる。

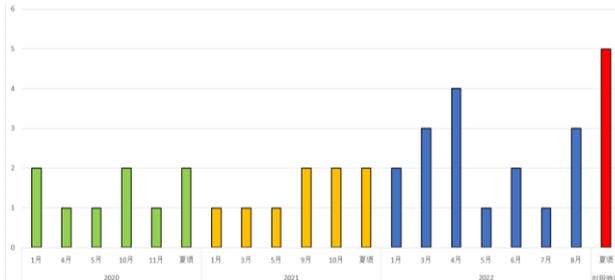


図-4 入部時期

園芸部の課題として、「参加しやすい雰囲気づくり」が最も多く挙げられている(図-5)。コアメンバーからは、より多くの部員に参加して欲しいとの声が聞かれる一方、植栽管理について常連の固定メンバーによる特定のコミュニティが形成されており、新規の部員が参加しにくい状況があることが、潜入調査からも明らかになっている。

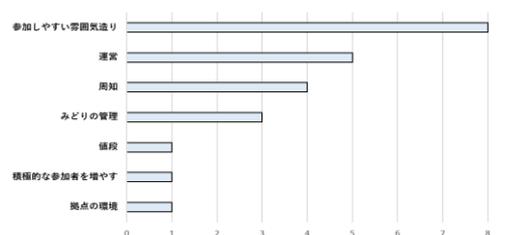


図-5 園芸部の課題

##### (2) 祐天寺駅周辺での意識調査

祐天寺駅周辺地区まちづくり部会のメンバー17 人を対象に、アンケート調査を実施した。まちづくりに協力的な部会メンバーであっても、地域の植栽管理の参加は、月1程度が望ましいという結果となった(図-5)。

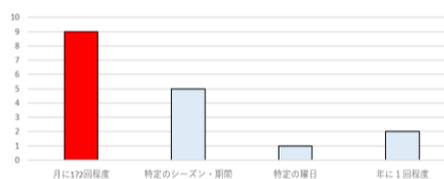


図-5 みどりの維持管理に携われる回数

植栽管理の協力をしたい場所については、駅前広場が最も多い結果となった(図-6)。その理由としては、住民以外の来街者も訪れ、祐天寺の顔となる場所であるためとの声が多く聞かれた。

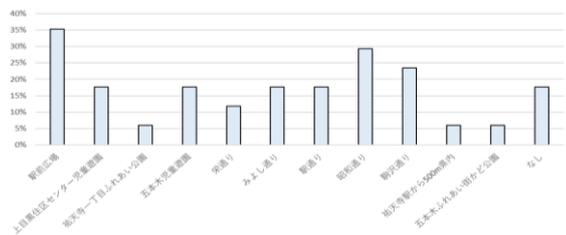


図-6 植栽管理の協力をしたい公共空間

### (3) シモキタ園芸部と祐天寺の比較

シモキタ園芸部と祐天寺の間で共通の質問項目を設定し、両地区で比較分析を行った。

自宅で育てている植栽に着目すると、花卉、低木はどちらの地域でも比較的多く育てられていることが共通点として挙げられる。一方、果物・野菜、観葉植物、高木では両地区の間に大きな差があることが分かった。この内、観葉植物、果物・野菜については、園芸部では近隣の方から植物を譲り受け新たな人に渡す取り組みを行っていることによるものと考えられる。中木・や高木について、祐天寺の方が高い理由として、自宅と隣接する住宅や道路との目隠しとして、背の高い樹木を植える傾向にあることが挙げられる(図-7)。

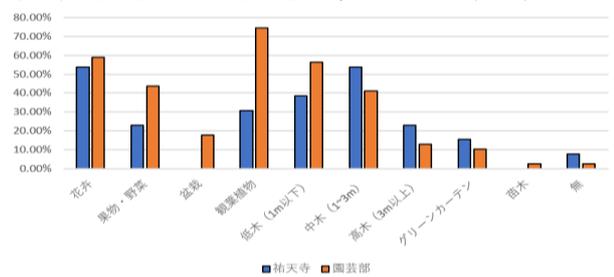


図-7 自宅で育てている植栽の種類

グリーンインフラという言葉の認知度については、祐天寺の35%に対して、園芸部では74.4%と非常に高い結果となった。みどりに係る活動への参加を通じて、みどりが持つまちづくり上の効果に対する意識が高まっていることが窺える。

まちに必要とされるみどりの効果については、いずれの地区においても、まちの景観形成、生物生息空間の形成が共通して多くみられた。一方、グリーンインフラの認知度が高い園芸部では、ヒートアイランド現象のような、住民の健康や生活と関連する効果や、イベント・レクリエーションの場といった、コミュニティ形成や地域交流と関連する効果についても、求められていることが分かった(図-8)。

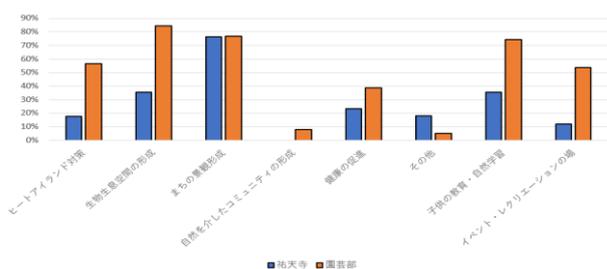


図-8 まちに必要だと感じるみどりの効果

## 5. まとめ・考察

祐天寺駅周辺地区では、公園などの公共空間のみどりについては、手入れが十分でない場所も散見された。一方、裏通りの住宅街にはみどりが多く存在するとともに、みどりに対する興味関心の高い地域住民の存在が明らかになった。地域住民に対するアンケート調査でも、駅前広場をはじめとする公共空間の植栽管理について、協力的な姿勢であることが窺えた。

北沢駅周辺では、まちの植物を守り育てることを目的とした「シモキタ園芸部」が、みどりの管理や植物の営みを活かしたイベントなどを行っている。小田急からの委託を受けながら、民地・公有地の一体的な植栽管理を実現するとともに、週末に様々なイベントを開催することで、新規部員と活動財源の継続的な獲得に成功していた。

園芸部員のグリーンインフラに対する認知度は高く、みどりが持つ多面的な効果に対する理解度も高いことが分かった。今後、祐天寺駅周辺地区に限らず、市民参加型の植栽管理を通じたまちづくりを展開する上で、園芸部の活動が参考になるものと考えられる。

なお、園芸部では、土日祝日のイベントには多くの部員が参加する一方、平日の植栽管理への参加率向上が課題となっている。市民参加型グリーンインフラの取り組みにあたり、イベント開催等を通じた活動規模の拡大と併せて、誰もが活動に参加できる自由な環境づくりを通じて、コアメンバーを育成・増員していくことも重要であると考えられる。

### 参考文献

- 1) 福岡 孝則, 加藤 禎久: ポートランド市のグリーンインフラ適用策事例から学ぶ日本での適用策整備に向けた課題, ランドスケープ研究, 78巻, 5号, pp.777-782, 2015
- 2) 岩浅 有記, 西田 貴明: 人口減少・成熟社会におけるグリーンインフラストラクチャーの社会的ポテンシャル, 日本生態学会誌, 67巻, 2号, pp.239-245, 2017
- 3) 飯島健太郎: 緑化学から見た公衆衛生・グリーンインフラ, 日本緑化学会誌, 43巻, 3号, pp.470-478, 2018